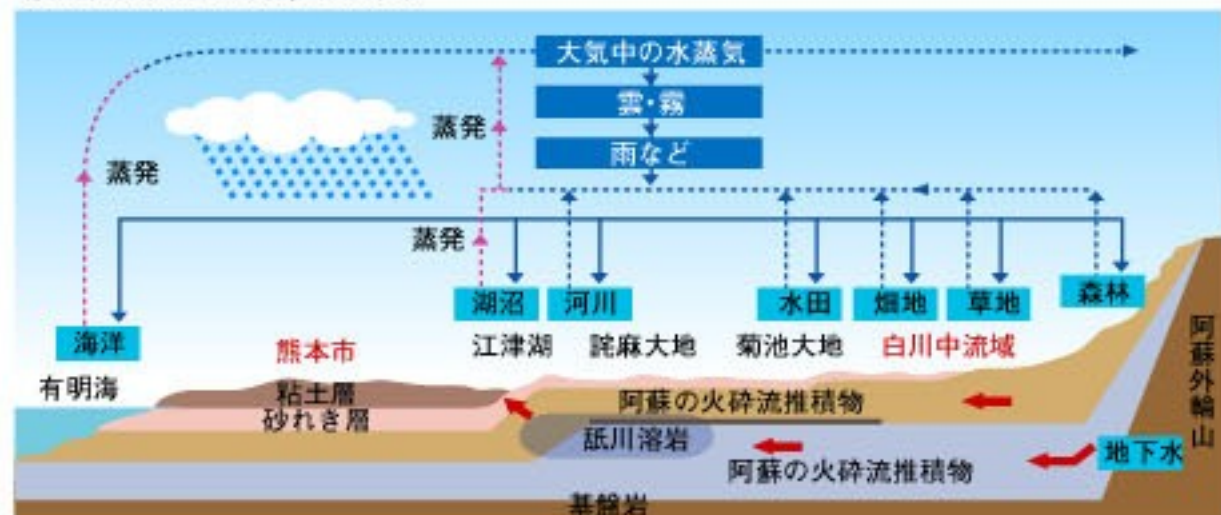


地下水のかん養を支える地産地消

「おいしい水」としても有名な熊本市圏の生活用水は、100%を地下水でまかっています。そのしくみは、阿蘇山から有明海にそそぐ一級河川・白川の中流域がかん養域（※1）としての機能を果たし、そこから浸透した水が地下水となって下流域へ移動し、生活用水や工業用水として熊本市内でくみ出されます。（図A）

（図A）地下水かん養のしくみ



白川中流域は、通常の水田の5倍以上と言われる水浸透能力で豊かな地下水を育んできましたが、最近の都市化や減反によるかん養域の減少で地下水のかん養量も下がりました。

この影響を受けて水不足が深刻化した熊本市では、唯一の水資源である地下水を守るためにかん養量を上げる方法として、田畑の水張りに着目しました。

一方、白川中流域にある4つの土地改良区では、平成13年におこった白川の渇水で、初めて協力しあうことによってこの状況を乗り越えました。これが大成功をおさめたことから交流が始まり、平成15年4月には4つの改良区による「白川中流域土地改良区協議会」が設立されました。

そこへ熊本県から地下水保全への協力要請があり、平成15年10月、行政やJAなどが加わって「水循環型営農推進協議会」を設立。地下水かん養が営農にむすびついた循環型の地下水保全ができるよう、活動を開始しました。

■地下水かん養の推進と広報活動

平成16年の4月には、大豆やニンジンを植え付けする前の畑に水張りをしてもらい、地下水をかん養するという事業が大津町と菊陽町の農家でスタート。5月から10月の灌漑時期に3ヶ月ほどの水張りを協力してくれる農家に対しては助成金が出されました。

しかし始めのうちは、どうなるのか分からないリスクもありうまく受け入れられませんでした。狭い範囲から少しずつやってもらえるよう理解を求める活動が続けられると同時に、この湛水農法（※2）に関するデータの研究やPRなども進められました。こうした行政とJA、また各団体との連携により協力農家は着実に増えてきましたが、一番の追い風となったのは、企業の協力とマスコミの効果です。



ソニーセミコンダクター九州では、日頃から工業用水に使用している地下水が減少していることを受けて、その地下水のかん養を育む活動に協力したいと、平成15年度から水田湛水農家に対して助成金を負担。それだけにとどまらず、湛水に協力する農家との交流も大切に行っています。毎年開かれるソニーの夏祭りには協力農家を招き、逆に秋の収穫祭には地元の協力農家から招かるといった相互交流を楽しんでいます。

こうした企業の活動や地下水かん養に関する記事は、たびたび新聞などで大きく取り上げられ、それが地域住民の意識を高めることにもつながっています。



また、地域住民への理解を促すイベントも開催。毎年恒例となった「農業フェア」では田んぼの生き物観察などを企画しています。平成15年度から始まった「田んぼの学校」には地元はもちろん熊本市内の小学校も参加しました。地下水かん養を専門に研究する九州東海大学・市川教授による分かりやすい話を聞いた子供たちからは、「自分たちの身近にある田んぼの水が、熊本の貴重な地下水になっていることに驚いた。農地や農業用水の大切さを学びました。」といった感想が出るなど、地下水かん養に興味を持つきっかけとなりました。



ほかにも、都市住民が参加する「農業体験」イベントを実施。熊本市内の6家族が月に一回のペースで半年間、大津町の水田で田植えから収穫までを体験しました。同時に地下水かん養についても学び、地下水の恵み、かん養の大変さを理解することで、都市での生活で水を大切にする意識を高めます。こういった都市に住む農業体験者や田んぼの学校に参加した人々が、都市に戻って地下水かん養のことを広めてほしいという願いもあります。

(※1)かん養域

雨水などが地下に浸透しやすく、地下水をつくることのできる地域を言います。地下水かん養とは、こういった地域に水を入れて地下水を育むことです。

(※2)湛水農法

ここでは作付け前の畑や、転作した水田に水を張ることを湛水と言い、湛水後に農作物をつくることを湛水農法と言い、水を張ることで土壌中の害虫駆除などの効果が期待できるため、農薬を減らすことができます。

親水と農体験が盛り上げる地域意識

■生産者と消費者を結ぶ、「水の恵み」

地下水かん養をめぐる様々な活動が地域に広がっていく流れの中で、今度は生産者や消費者を主体とする団体「豊かな地下水を育むネットワーク」が平成16年2月に設立されました。もともと湛水農法でニンジン栽培していた大田黒さんを中心に、農家と消費者、環境団体などが連携して、地下水かん養を推進しています。

田畑への水張りは、土壌中の害虫駆除や連作障害の抑制など農業面での効果も確認されています。しかし一方で、農薬はいらないが湛水のための費用や手間がかかるといったデメリットも受け入れなければなりません。

ただ、この減農薬の水張り農地でできた作物は安全でおいしいのです。その上、多くの人が必要としている地下水も育んでくれる。こういった質の高い農作物をブランド化して消費者の人たちへもアピールしていこうと、「水の恵み」が誕生しようとしています。今後、水張り農地でできた「水の恵み」という農作物がスーパーに並ぶ日も、そう遠くはないでしょう。



中流域で地下水を育みながらおいしい農作物をつくり、地下水の恵みを受けている下流域の人々がそれを理解し、喜んで食べてくれるといった「地産地消」の実現が、本当の水循環型営農として、地下水の保全につながるのではないのでしょうか。

大津町

イメージPhoto

■地区概要：

熊本県の北東部に隣接した菊池郡大津町と菊陽町にまたがる都市近郊型の農村地帯。阿蘇を水源とした、白川に流れる豊富な水を育む地下水かん養域として、重要な役割を果たしてきた。

MOVIE：インタビュー映像



湛水農法を普及させていく際に苦労した点を教えてください
大津町・農家／太田黒さん

Win
3.0MBMac
3.0MB

都市住民が参加する農業体験イベントの効果は？
大津町・JA／〇〇さん

Win
3.0MBMac
3.0MB